

今朝は世界宣教を覚えて、マルコの福音書 16章から学んでいきましょう。

1. 復活の知らせを聞いて (9～13節)

①復活の主とマグダラのマリヤ (9～10) 「さて、週の初めの日の朝早くによみがえったイエスは、まずマグダラのマリヤにご自分を現わされた。イエスは、以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたのであった。マリヤはイエスといっしょにいた人たちが嘆き悲しんで泣いているところへ行き、そのことを知らせた。」

この聖書箇所背景はキリストの復活です。週の初めの日とは日曜日です。その早朝に主は復活されました。そしてまずはマグダラのマリヤにその姿を現わされました。それは 1～8 節に記されています。かつて七つの悪霊から解放された彼女ですが、復活の主と最初に会う恵みに浴しました。その出会いをイエスの周りにいた弟子たちのところに、報告に行ったのです。

②信じない弟子たち (11) 「ところが、彼らは、イエスが生きておられ、お姿をよく見た、と聞いても、それを信じようとはしなかった。」

しかし、主が復活されたこと、その姿を見たことを伝えたにもかかわらず、弟子たちは信じようとしなかったのです。

③いなかに向かう二人 (12～13) 「その後、彼らのうちのふたりがいなかのほうへ歩いておりに、イエスは別の姿でご自分を現わされた。そこでこのふたりも、残りの人たちのところへ行ってこれを知らせたが、彼らはふたりの話しを信じなかった。」

復活の主は別のところでも現われてくださいました。「二人がいなかのほうへ歩いて」とありますが、これはルカの福音書 24 章に出て来る二人と同じだと考えて問題ないでしょう。だとすれば、エマオという村に向かっていた、クレオパともう一人の弟子です。その二人と、復活の主は共に歩いてくださったのです。後で心が燃やされていた自分たちが、復活のキリストと出会っていたことを確認し、それを弟子たちに伝えましたが、彼らは信じなかったのです。

2. 世界宣教命令 (14～18節)

①十一人に現われた復活の主 (14) 「しかしそれから後になって、イエスは、その十一人が食卓についているところに現われて、彼らの不信仰とかたくなな心をお責めになった。それは、彼らが、よみがえられたイエスを見た人たちの言うところを信じなかったからである。」

イスカリオテのユダを除く 11 人の弟子たちが食卓についている時、復活の主は現われたのです。そして、人間の罪の根本である彼らの不信仰と頑なさを、責められたのです。復活の主の証言を彼らが信じなかったからです。

②宣教命令 (15～16) 「それから、イエスは彼らにこう言われた。『全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。信じてバプテスマを受ける者は救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。』」



その上で、主は福音を宣べ伝えよというご命令をされました。それも全世界に出て行って、すべての造られた者に伝えよというのですから、スケールが大きいのです。信じる者は救われ、不信の者は罪に定められるというお言葉は厳しいですが、実を言えば愛の表現です。

③信仰のしるし (17~18) 『信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます。』

信じる者にはしるしとして、悪霊追放、新しい言葉を語ること、蛇をもつかみ、毒を飲んでも無害で、病人への癒しといった賜物が与えられるとあります。このしるしを、この時代にあっては無意味だととらえるのではなく、信じることにはそれほどの恵みと意味があるのだと理解することは大切です。

3. 昇天と弟子たちの宣教 (19~20 節)

①天に上げられ (19) 「主イエスは、彼らにこう話されて後、天に上げられて神の右の座に着かれた。」

この福音書の記者マルコは、復活の主が昇天されて、神の右の座に着かれたと記しています。この内容は、使徒信条でも告白されています。また、使徒の働き 1 章にも、昇天のことが記されています。

②出て行き (20) 「そこで、彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。」

全世界へ出て行って、福音を宣べ伝えよという命令を受けて、弟子たちは、至る所で福音宣教を始めました。聖霊が降臨する前から、キリストに促されて、弟子たちは宣教へと進ませられていたことがわかります。

③みことばに伴うしるし (20) 「主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされた。」

主は弟子たちの宣教を用いてくださいました。その証として、彼らが伝える御言葉に伴う奇跡的な働きを与えてくださいました。そのことにより、御言葉の確かさを示してくださいましたのです。

《結論》

マタイの福音書において、復活のイエス・キリストはガリラヤに弟子達を集めて、世界宣教命令をされています (28:19~20)。そこにおいては、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」で結ばれています。ところが、マルコの福音書では、「信じる者は救われ、信じない者は罪に定められます。」に続き、信じる者のしるしについても記されています。悪霊追放、新しい言葉を語る、蛇をもつかみ、毒を飲んでも害を受けず、病人をいやす、と語られています。マルコの福音書を読む人は、この末尾の部分でちょっと不思議に思うのです。どうして主イエスは「蛇をもつかみ」とか「毒を飲んでも害を受けず」といったことを、信じる者の賜物に加えられたのだろうかと感じるのです。別に蛇をつかむ必要もないし、毒を飲んで害を受けないことが信じること、どのような関係があるのかと疑問に思うのです。しかし、主イエスはあえてこれらを加えられたと考えます。つまり、世界宣教をしていく場所には、実際に

蛇が出てくる地があるでしょう。また、毒のある植物などが多くある地があるかもしれません。そんなことまで考慮しながら、主はそれらを加えておられるのだと考えられます。

そこでです。宣教命令をもう一度開いてみましょう。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」。主イエスが命令されたこの宣教命令で大切なことは、宣教範囲をユダヤやその周辺に限ることなく、全世界と言われていることです。そして、人々についても、特定の国や人種に限らず、すべての造られた者を対象に伝えるように命令されているのです。ですから、主のお考えのなかには、当時のユダヤ地域ばかりでなく、政治的、文化的に異なる地をも含めて語っておられるのです。だから、蛇をもつかむという言葉も出てきたものと思われれます。主イエスはユダヤとガリラヤ地域を中心に宣教されましたが、主のビジョンは全世界での伝道、すべての人々に対する伝道であったのです。紀元前 4 世紀のマケドニアのアレキサンダー大王は、東はインドまで勢力を広げようとしていました。かなり、広い地域が世界として認識されていました。主はさらに広い世界を意識し、すべての造られた者への福音宣教をイメージされていたのです。

使徒パウロが宣教できたのは地中海世界でしたが、パウロは全力でこの御言葉を遂行しました。そこで、パウロの後につく者達は、その範囲をさらに広げていく使命を持っていました。クリスチャン達は迫害などにも屈せず、福音は野火のように広がっていったのです。その後のキリスト教史をここで伝えることはできませんが、ともかくもその福音は私どもまで届いています。聖書も私たちの手元にあります。それでは、私たちはどうしたら良いのでしょうか。そうです。私達も、復活の主が命ぜられた世界宣教命令を、自分達へのものとして、受け取っていくことが大切なのです。

この御言葉を受けて、福音を必要としている地への宣教に召し出される人々がいます。宣教師といえます。長老教会の関係でも数人の人々が外国の地での宣教に送り出されています。概して、派遣されていく地は、宣教が困難な地が多いです。宣教地から、追放されてしまった例も最近ありました。また、近くで戦いが繰り広げられている場合などもあります。ウイクリフ聖書翻訳協会は聖書を少数部族の言語に翻訳する仕事を使命としています。高田宣教師夫妻はかつてコラ語の翻訳を、また小栗元宣教師はインドネシアのイシラワ村の言語に聖書翻訳に従事されました。

これからも若い世代の人々が新しい地での働きに召されていくことでしょう。そうした世界宣教のために、私たちができることは、第一に祈ることです。そして、第二には献金することです。先週、「海外宣教報」を配布しましたが、読んで導かれるところがあるならば、祈りましょう。そしてお献げいたしましょう。そのことを通して、私たち自身も、世界宣教に参加することになるのです。また、私たちの教会が、霊的に成長するためにも、目を世界に向け、地域伝道に挺身していくことはとても重要なことなのです。主イエスの恵みの福音を確かめ、それが世界に広がっていくように祈っていきましょう。